

〔原著〕

## チームメイト間における躊躇と衝突に関する質的研究

小 川 茜 \*  
長谷川 大地 \*\*  
佐々木 丈 予 \*  
関 矢 寛 史 \*

### Qualitative research on hesitation and collision among teammates

Akane OGAWA

(Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University)

Daichi HASEGAWA

(Hatsukaichi City Government)

Joyo SASAKI

(Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University)

Hiroshi SEKIYA

(Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University)

#### Abstract

In team sports, interpersonal coordination failures among teammates such as hesitation and collision often occur. However, the reasons why they occur have not been studied. The purpose of this study was to qualitatively investigate hesitation and collision behavioral factors in team sports. Fifteen students (male=8, female=7) who had experienced hesitation and/or collision in team sports (baseball, softball, volleyball, soft tennis, and soccer) participated in a semi-structured interview. The verbal protocols of hesitation and collision were separately analyzed using KJ methods. Qualitative analyses extracted 10 common factors between hesitation and collision: “tense situations,” “a ball which could be caught by either player,” “unordinary situations,” “negative psychological states,” “communication failures,” “carelessness,” “thinking that I should catch the ball,” “harmful influences,” “no influences,” and “taking countermeasures.” Five factors relating only to hesitation were extracted: “thinking that my partner can catch the ball,” “seeing my partner,” “thinking that I do not want to make mistakes,” “avoidance of collision,” and “I could not move.” Additionally, 6 factors relating only to collision were extracted: “seeing the ball, but not my partner,” “a behavior that is unavoidable for team performance,” “appeals as a good player,” “high performance and concentration before collision,” “avoidance of hesitation,” and “failure to avoid my partner.” These results indicate that hesitation and collision share many common factors, but also differ in several ways, such as in terms of players’ perceptions and attitudes toward each failure.

---

\* 広島大学大学院総合科学研究科

\*\* 廿日市市役所

## I. はじめに

チームスポーツで良いパフォーマンスを発揮するためには、個人のスキルと共に、チームメイト間の巧みな連携が必要である。しかし、巧みな連携が必要な場面において、チームメイト間で躊躇する、もしくは衝突するといった場面がみられる。例えば前者は、複数の野球選手がボール捕球を躊躇するような場面であり、また後者は複数の選手がボール捕球時に衝突するといった場面である。躊躇や衝突は、協力関係にあるチームメイト間の連携における失敗行動といえる。そして、躊躇を起点に失点をする事例<sup>1)</sup> (e.g., 日刊スポーツ, 2010) や、選手が衝突により怪我をする事例が見受けられるように<sup>2)</sup> (e.g., 日刊スポーツ, 2014a, 2014b), 躊躇や衝突は、選手やチームのパフォーマンスに悪影響を与えると考えられる。

では、協力している選手同士がなぜ躊躇や衝突といった失敗行動を起こすのだろうか。躊躇や衝突に関する先行研究では、これまでに以下のような報告がみられる。例えば吉田 (1986) は、バレーボールのコンビネーションプレーに関する文献をまとめる中で、バレーボールにおける躊躇は2人の間の共通理解が乏しい時にみられる現象であり、国際試合等の高いレベルでも見られると述べている。そして吉田はその対応策として、ボールの飛来方向と味方選手の動きを把握し、状況に応じて先取りした意思表示を行うことが必要であると提起している。つまり、選手の知覚やプレイにおける判断能力の重要性を指摘する言及である。また躊躇や衝突のような単純ミスと選手のパーソナリティ特性との関係を調べた研究 (氏原, 2013) もあるが、この研究では躊躇や衝突に関係するパーソナリティ特性は示されなかった。氏原は、自分でコントロール出来る技術的なミスを単純ミスと定義し、バレーボール指導者に行ったインタビュー内容から、単純ミスについての質問紙を作成した。そして、その質問紙とY-G性格検査への回答を選手に求めた。単純ミスの質問紙には、「味方選手とのお見合い」、「味方選手との衝突」

という2項目が含まれていたが、因子分析の結果、「味方選手とのお見合い」という項目は除外され、さらに「味方選手との衝突」という項目を含んだ因子はどのパーソナリティ特性とも関係が認められなかった。さらに、実験室実験において躊躇と衝突を調べた研究 (小川, 2012; Ogawa and Sekiya, 2013) もみられる。まず小川 (2012) は、躊躇と衝突にどのような種類があるのかを調べるため、実験参加者の手の動きに基づき、両行動を質的に分類した。この実験では、2人1組の実験参加者に選択反応課題を行わせており、教示内容は、呈示されたターゲットを2人で協力して出来る限り早く押す、2人のうちどちらがそのターゲットを押しても良い、というものであった。実験の結果、躊躇が5種類、衝突が1種類、さらに、1つの刺激に対して躊躇と衝突の両方を起こす複合が5種類抽出されており、これらの失敗行動には質的に異なる動きが複数あることが明らかとなった。またOgawa and Sekiya (2013) は、習得過程と心理的プレッシャーが躊躇や衝突に及ぼす影響を調べるため、小川 (2012) と同様の実験を行った。その結果、習得過程において躊躇と衝突の生起は減少し、さらに心理的プレッシャー下においては不安感情の増加と共に躊躇と衝突の生起が増加した。つまり習得初期や心理的プレッシャーがある状況では躊躇や衝突が起きやすいといえる。

このように、様々な角度から躊躇と衝突についてこれまで調べられている。しかし、選手たちがなぜ躊躇や衝突を起こすのかを考える上で、これまでの先行研究では判然としない点がある。それは、躊躇や衝突の生起に関する要因を包括的に調べた研究が管見の限りなく、躊躇や衝突の全体像が把握されていないという点である。例えば、躊躇や衝突には必ず2人以上が関与するが、それぞれの選手がどのように動いた結果、躊躇や衝突が起きるのかという点はまだ明らかでない。また、不安感情と躊躇、衝突の間に関係があることは明らかになっているが (Ogawa and Sekiya, 2013), 他の感情との関係は明らかになっていな

い。さらに、躊躇と衝突はどのような点が類似しているのか、どのような点が異なるのかも明らかでない。チームメイト間の連携における失敗行動には、パスミスなども該当すると考えられるが、パスミスの発生原因については検討されている一方で (e.g., 田村ほか, 1998, 2004), 躊躇や衝突についてはなされていない。躊躇や衝突への有効な対応策を検討するためにも、躊躇や衝突に関する生起要因を明らかにすることは重要である。

現象を包括的に検討する研究手法の1つとして、質的手法が挙げられる。質的手法とは、あらかじめ決められた変数は使わずに、データを帰納的に扱うことで新しく予期していなかった意味や経験のカテゴリーを生み出せる研究手法である (ウィリッグ, 2003)。そのため、質的手法を用いることで、躊躇や衝突に関連する要因を限定せずに調べることが可能になる。なお、躊躇と衝突の定義について、本研究では小川 (2012) を参考に、(1) 躊躇とは、複数のチームメイトがボールへの対応をためらうこと、(2) 衝突とは、ボールへの対応時に複数のチームメイト間で身体接触が起きること、と定義した。以上より本研究の目的は、チームメイト間の躊躇と衝突の生起に関連する要因を質的手法を用いて明らかにすることであった。

## II. 方法

### 1. 被調査者

チームメイト間において躊躇や衝突が起り得るチームスポーツの経験がある大学生、院生 15 名 (男性 8 名, 女性 7 名;  $25.67 \pm 3.68$  歳) が調査に参加した。競技種目の内訳は、野球 (男性 4 名; 以下, 野球 A, 野球 B, 野球 C, 野球 D と表記), ソフトテニス (男性 2 名, 女性 1 名; 以下, ソフトテニス男子 A, ソフトテニス男子 B, ソフトテニス女子と表記), ソフトボール (女性 3 名; 以下, ソフトボール A, ソフトボール B, ソフトボール C と表記), バレーボール (女性 3 名; 以下, バレーボール A, バレーボール B, バレーボール C と表記), サッカー (男性 2 名; 以下, サッカー

A, サッカー B と表記) であった。なお、事前に過去のスポーツ場面において躊躇と衝突のどちらか一方、または両方の経験があることを確認し、研究への協力を依頼した。全ての被調査者から、調査を開始する前にインフォームド・コンセントを得た。

### 2. データ収集

過去のスポーツ場面において経験した躊躇または衝突のうち、最も印象に残っている場面を想起させ、1人ずつ半構造化面接を行った。本研究においては、大会や試合場面だけでなく、練習場面において経験された躊躇や衝突も調査の対象とした。面接における基幹質問項目は、(1) 躊躇、衝突が起きた時の状況 (どのような大会または試合だったのか、その重要性、被調査者のチーム及び対戦相手の競技レベル), (2) 躊躇、衝突を起こしたチームメイトとの人間関係, (3) 躊躇、衝突が起きた前後の心理状態, (4) 躊躇、衝突が起きた前後に何を意識してプレイしていたか, (5) 躊躇、衝突が起きた時の動き, (6) パフォーマンスへの影響, (7) 躊躇、衝突に対する対処, の7つであった。

### 3. 調査手続き

第1著者が所属する大学の研究室において、被調査者と調査者 (第1著者または第2著者) の2名で個人面接を行った。面接前には被調査者と約 15 分間の会話をし、ラポールの形成に努めた。

面接には半構造化面接を用いた。被調査者の入室後、最初に本研究と面接の目的、躊躇と衝突の具体的な説明を行った。説明の内容は以下の通りであった: 今回の研究における躊躇は、実際にスポーツ場面で言われているお見合いのことです、またお見合いの程度は完全に相手と見合った結果、誰も触れず失点した場合だけでなく、結果的にボールは返球 (または捕球) 出来たが少しでもパフォーマンスが低下した場合もお見合いとします。衝突は選手同士の接触のことです。次に、躊躇と衝突について、基幹質問項目に沿って面接を

行った。また、基幹質問項目以外にも、研究目的から逸脱しない範囲で、会話の中から出てきた話題を用い、柔軟に質問を行った。面接時間は約30～60分であった。なお、躊躇という言葉は被調査者にとって聞きなれない言葉であるため、面接中は実際にスポーツ現場において用いられている、お見合いという言葉を用いた。面接の内容は、被調査者の了解を得た上でボイスレコーダー(Panasonic RR-US470 - K)に録音した。

#### 4. データ分析

面接内容の分析にはKJ法(川喜田, 2005)を用いた。まず録音したインタビューデータを基に逐語録を作成した。そして、ラベル作りとグループ編成を躊躇と衝突に分けて行った。グループ編成では、まずラベルの類似性に着目しながら、意味の類似したラベルをまとめていき、その内容を過不足なく表現できるグループ名をつけて1段目のグループとした。次に、グループの類似性に着目しながら、1段目のグループを2段目のグループとしてまとめ、より高次のグループを生成した。この作業を、新たにグループが生成されなくなるまで行った。この手続きを経た結果、最終的に4段目のグループが最上位階層に位置した。本稿では、4段目グループをダブルクォーテーションマーク(“”), 3段目グループをクォーテーションマーク(’), 被調査者の発言内容を二重鍵括弧(『』)で囲み示す。なお分析では図解化は行わず、グループ編成までとした。また、各段階において第1著者を含めてのトライアンギュレーションを行った。トライアンギュレーションとは、複数の研究者などで1つの研究テーマを検討することで、より多面的、包括かつ妥当性の高い研究内容を得る調査デザインであり(フリック, 2002)、質的研究においても、データの信頼性、妥当性を高めるための手法として用いられている。本研究では、複数の質的研究に共同研究者として参画した経験を持つスポーツ心理学研究者1名およびスポーツ心理学を専攻する大学院生2名が参加した。

### Ⅲ 結果

#### 1. 躊躇

躊躇については、12事例が得られた。競技種目の内訳は、ソフトボールとバレーボールが3例ずつ、野球、ソフトテニス、サッカーが2例ずつであった。まず、102頁(40字×35行)にわたる逐語録の中から、348の意味単位を抽出した。そしてグループ編成の結果、最終的に4段目のグループとして(1)“緊迫した状況”, (2)“2人/3人が取りに行ける範囲にボールがきた”, (3)“いつもと異なる状況”, (4)“ネガティブな心理状態”, (5)“コミュニケーションのミス”, (6)“気の緩み”, (7)“自分が取るボールだと思った”, (8)“相手が取れると思った”, (9)“相手が見えた”, (10)“自分が触ってミスをしたくなかった”, (11)“衝突を避けようとした”, (12)“体が動かなかった”, (13)“悪影響”, (14)“影響はなかった”, (15)“躊躇後、対策を練った”という15のグループが抽出された。3, 4段目グループの内容を表1に示す。なお表1では、1, 2段目のグループ及びラベルの記載は省略した。以下、各グループの生成過程について記述する。

##### (1) “緊迫した状況”

ある被調査者(バレーボールA)は『そのセットを取れば優勝』という、重要度の高い場面で躊躇を起こしたことを報告しており、また別の被調査者(ソフトテニス男子A)は『対戦相手にリードされ負けている状況で、自分たちからは突破口が見えない感じ』と報告し、対戦相手が強く、攻められている場面において躊躇が起きたと説明した。12事例のうち8事例が緊迫した状況に該当しており、多くの躊躇がこのような状況で起きていたことが示された。

##### (2) “2人/3人が取りに行ける範囲にボールがきた”

このグループでは例えば、『自分と相手のちょうど真ん中辺りにボールがきた(サッカーA)』という報告がみられた。全事例においてこのグループに関する報告がされたことから、2人また

表 1. 躊躇の生起に関する要因

グループ編成	
4 段目	3 段目
(1) 緊迫した状況	緊迫した状況
(2) 2人/3人が取りに行ける範囲にボールがきた	2人/3人が取りに行ける範囲にボールがきた
(3) いつもと異なる状況	いつもと異なる状況
(4) ネガティブな心理状態	緊張
	弱気な考え
	焦り
	精神的な疲れ
	消極的
(5) コミュニケーションのミス	自信が無かった
	声掛けのミス
	2人の間のボールをどちらが取るかは決めていなかった
	声が被った時の対策は決めていなかった
(6) 気の緩み	コミュニケーション不足
	重要度の高い場面
(7) 自分が取るボールだと思った	気の緩み
	相手を信頼していなかった
(8) 相手が取れると思った	自分が取らなければいけないという義務感があった
	相手が取れると思った
	自分より相手の方が上手かったため信頼していた
(9) 相手が見えた	相手は守備に積極的だと思っていた
	相手が見えた
(10) 自分が触ってミスをしたくなかった	相手が見えた
(11) 衝突を避けようとした	自分が触ってミスをしたくなかった
	衝突を避けようとした
(12) 体が動かなかった	試合序盤で体が固まっていた
	頭が混乱して体が動かなかった
(13) 悪影響	躊躇による悪影響
	躊躇と衝突の悪循環
(14) 影響はなかった	躊躇による影響はない
(15) 躊躇後、対策を練った	躊躇後、対策を練った

注) グループ編成における 1, 2 段目及びラベルの記載は省略した。

は 3 人の間にボールが来ることが、躊躇を起こす条件であったと推察される。さらに、例えば『落とさないだろうと周りも思うような簡単なボール(バレーボール B)』など、プレイの難易度が比較的易しい場面で躊躇を起こしたという報告がいくつも得られた。つまり、躊躇は必ずしもプレイが難しい場面で起きた訳ではないといえる。

#### (3) “いつもと異なる状況”

このグループにおける報告の約半数は、慣れていない選手と組んだために動きのイメージが出来なかったというものであった。例えば『相手と一緒に練習した期間は短く、相手がどれくらい守るか分かっていなかった(ソフトボール B)』とい

う報告がみられた。

#### (4) “ネガティブな心理状態”

このグループは、‘緊張’、‘弱気な考え’、‘焦り’、‘精神的な疲れ’、‘消極的’、‘自信が無かった’という 6 つの下位グループにより構成された。このような心理状態に至った経緯は様々であり、『試合展開が悪く、弱気になっていた(ソフトテニス男子 A)』という試合展開による影響であったという報告や、『自分がキャプテンになったばかりで緊張していた(ソフトボール B)』というチーム内での役割に関する報告などがみられた。

#### (5) “コミュニケーションのミス”

このグループは、‘声掛けのミス’、‘2 人の間

のボールをどちらが取るかは決めていなかった', '声が被った時の対策は決めていなかった', 'コミュニケーション不足' という4つの下位グループにより構成された。'声掛けのミス'の中には, 声が無かったというミスと, 声掛けが被ったというミスがみられた。そして声掛けが被った被調査者(バレーボールC)は, 『声が被った時の対策は決めていなかった』とも報告している。また, 'コミュニケーション不足'については, 『慣れていないメンバーだったから, コミュニケーション不足もあった(サッカーA)』という報告がみられた。つまり'声掛けのミス'は, ボールがきた時点におけるコミュニケーションのミスであったが, 他の3つは, 躊躇が起きるより前の時点におけるコミュニケーションのミスであった。

(6) “気の緩み”

このグループは, 『ベスト4入りし, 上の大会への出場を決めた後の試合(ソフトテニス男子A)』などの発言から成る'重要度の高くない場面'と, 『プレッシャーが無く, 集中が削がれていた(バレーボールC)』などの発言から成る'気の緩み'という2つの下位グループにより構成された。

(7) “自分が取るボールだと思った”

このグループは, '相手を信頼していなかった', '自分が取らなければいけないという義務感があった'という2つの下位グループにより構成された。'相手を信頼していなかった'について, 例えばある被調査者(ソフトテニス男子A)は『相手は前の試合でミスをしており, その試合でもミスが多かったので, もう信頼していなかった』と報告した。'自分が取らなければいけないという義務感があった'について, ある被調査者(バレーボールC)は, 『メンバー的に, 自分が頑張ってレシーブを拾って打たなければと思いつながらプレイしていた』と報告している。

(8) “相手が取れると思った”

このグループは, '相手が取れると思った', '自分より相手の方が上手かったため信頼していた', '相手は守備に積極的だと思っていた'という3つの下位グループにより構成された。ここでは例

えば, 『相手は上手いので取れるだろうという信頼感があった(野球A)』という発言が得られた。(9) “相手が見えた”

例えばある被調査者(ソフトテニス男子B)は『相手がどこにいるか見えて, 2人とも届くと思っ  
てしまい動きを止めてしまった』と述べ, 相手の動きが見えたことで自分が止まり, 結果として躊躇となったと説明している。

(10) “自分が触ってミスをしなくなかった”

ある被調査者(ソフトボールA)は, 『守備がそんなに好きじゃないんですよ, なんか怖いっていうか。ボールがきたらミスするんじゃないかって思うし, ミスしたら怒られるじゃないですか。それが嫌だから。…(中略)…(ボールがきた時は)あつ, 相手が取れるんだ, 自分が取るより絶対いいわっていう気持ちと, 自分が取って落としたり怖いっていう気持ちの両方でした』と報告した。この報告から, 自分が触ってミスをしたくないという気持ちはネガティブ思考と共に生じていたことが分かる。

(11) “衝突を避けようとした”

ある被調査者(野球A)は『自分もボールに向かったが, 相手が勢いよく向かってくるのが見えて, ぶつかりそうで危ないと思い止まった』と報告し, 衝突を避けるために意図的に止まったことを説明した。また他の被調査者(野球B)は, 『怪我をするかもしれないので, 衝突は怖い』と衝突への恐怖心を語っていた。

(12) “体が動かなかった”

このグループは, '試合序盤で体が固まっていた', '頭が混乱して体が動かなかった'という2つの下位グループにより構成された。ある被調査者(ソフトボールB)は『試合序盤でそれまでボールが1球も来ておらず, 足が動いていなかった。…(中略)…一歩目があまり出なかった』と報告している。また'頭が混乱して体が動かなかった'について, ある被調査者(サッカーA)は, 『止まれという指令と次の場面のために動こうという指令がきて, 頭が混乱している感じ』と報告している。

(13) “悪影響”

このグループは、‘躊躇による悪影響’、‘躊躇と衝突の悪循環’という2つの下位グループにより構成された。‘躊躇による悪影響’では、失点など試合結果への悪影響や、対戦相手にそのコースを狙われるようになったといった試合内容への悪影響、チームの雰囲気悪化、躊躇したことによる落ち込み、そのコースを過剰に意識することで他のコースへの反応が遅れるようになったなど、様々な面への影響が報告された。‘躊躇と衝突の悪循環’について、ある被調査者（ソフトテニス男子B）は『お見合いした後に同じコースがきた時、お見合いをしたくないという過剰意識から、普段なら打たないコースまで無理をして取りに行きぶつかった』と、躊躇を避けようとした過剰意識が衝突に繋がった様子を報告している。

(14) “影響はなかった”

ある被調査者（バレーボールA）は、『コースを読み違えてのお見合いで落とし方は悪くなかったため、そんなに影響は無かった』と述べており、躊躇の原因に基づいて“影響は無かった”と判断したことを報告している。

(15) “躊躇後、対策を練った”

躊躇後の対策として被調査者たちは、躊躇した相手との守備範囲や声掛けの確認、他のチームメイトとの話し合い、守備や声掛けへの意識を高めた、集中し直した、積極的に行こうと思った、などを挙げていた。また『お見合い後、集中し直そうとチーム全体で話し、パフォーマンスが向上した（バレーボールC）』という報告のように、躊躇がパフォーマンス向上のきっかけとなった事例もあった。

## 2. 衝突

衝突については、9事例が得られた。競技種目の内訳は、ソフトボールが3例、野球、ソフトテニス、サッカーが2例ずつであった。まず、67頁（40字×35行）に渡る逐語録の中から、226の意味単位を抽出した。そして、躊躇と同様にグループ編成を行った結果、最終的に4段目のグループとして（1）“緊迫した状況”、（2）“2人が

取りに行ける範囲にボールがきた”、（3）“いつもと異なる状況”、（4）“ネガティブな心理状態”、（5）“コミュニケーションのミス”、（6）“気の緩み”、（7）“自分が取るボールだと思った”、（8）“ボールを見ていて相手を見ていなかった”、（9）“衝突は仕方ないと思う”、（10）“衝突してボールを取ること強さをアピールしていた”、（11）“衝突前のパフォーマンスは良く、集中していた”、（12）“躊躇を避けようとした”、（13）“相手を避けようとしたが出来なかった”、（14）“悪影響”、（15）“影響はなかった”、（16）“衝突後、対策を練った”という16のグループが抽出された（表2）。

(1) “緊迫した状況”

『インハイ予選で、勝たなければいけない重要な試合（ソフトテニス男子B）や『同点くらいで競った試合展開だった（サッカーA）』など、重要度の高い場面や競った試合展開であったことが報告されている。また9事例のうち6事例の衝突が緊迫した状況で起きており、多くの衝突がこのような場面で起きていた。

(2) “2人が取りに行ける範囲にボールがきた”

このグループでは、『フライボールは2人のちょうど間に飛んできた。難しいフライではなく、どちらも足を止めては取れないものの、どっちでもとれるものだった（野球D）』などの報告が得られた。躊躇と同様に、2人の間へのボール飛来が衝突を起こす条件であったと推察される。

(3) “いつもと異なる状況”

このグループも躊躇と同様に、報告の約半数は、慣れていない選手と組んだために動きのイメージが出来なかったというものであった。例えば、『いつも組んでいるレギュラーならそのコースは取りに来ないところだった（野球C）』という報告がみられた。また、球場の形の影響で2人の距離がいつもよりも近かったという報告（野球C）や、練習不足の時期だったという報告（ソフトテニス女子）もこのグループに含まれていた。

(4) “ネガティブな心理状態”

このグループは、‘緊張’、‘弱気な考え’、‘早く終わらせたかった’、‘ボールがきたことへの焦

表2. 衝突の生起に関する要因

グループ編成	
4 段目	3 段目
(1) 緊迫した状況	緊迫した状況
(2) 2人が取りに行ける範囲にボールがきた	2人が取りに行ける範囲にボールがきた
(3) いつもと異なる状況	いつもと異なる状況
(4) ネガティブな心理状態	緊張
	弱気な考え
	早く終わらせたかった
	ボールがきたことへの焦り
(5) コミュニケーションのミス	声掛けのミス
	2人の間のボールをどちらが取るか決めていなかった
	自分本位な気持ち
(6) 気の緩み	重要度の高くない場面
	気の緩み
(7) 自分が取るボールだと思った	相手を信頼していなかった
	自分が取らなければいけないという義務感があった
	自分が取るボールだと思った
(8) ボールを見ていて相手は見えていなかった	ボールを見ていて相手は見えていなかった
(9) 衝突は仕方ないと思う	偶然起きるものであり避けられない
	ぶつかってでもボールを取りたかった
(10) 衝突してボールを取ることで強さをアピールしていた	衝突してボールを取ることで強さをアピールしていた
(11) 衝突前のパフォーマンスは良く、集中していた	衝突前のパフォーマンスは良かった
	集中していた
(12) 躊躇を避けようとした	躊躇を避けようとした
(13) 相手を避けようとしたが出来なかった	相手を避けようとしたが出来なかった
(14) 悪影響	衝突には失点や怪我のリスクがある
	衝突による悪影響
	躊躇と衝突の悪循環
(15) 影響はなかった	怪我のことは考えていない
	衝突による影響はない
(16) 衝突後、対策を練った	衝突後、対策を練った

注) グループ編成における1, 2段目及びラベルの記載は省略した。

り」という4つの下位グループにより構成された。例えば「早く終わらせたかった」についてある被調査者(ソフトボールB)は、『4番バッターに回る前に、この3番バッターで切りたかった』と報告している。また他の被調査者(ソフトボールC)は「ボールがきたことへの焦り」について、『ボールが転がってきた時に、行かなくちゃと思って焦っていた』と報告している。

(5) “コミュニケーションのミス”

このグループは、「声掛けのミス」、「2人の間のボールをどちらが取るかは決めていなかった」、「自分本位な気持ち」という3つの下位グループにより構成された。躊躇と同様に衝突でも、ボー

ルが来た瞬間におけるコミュニケーションのミスと事前のコミュニケーションのミスが示された。一方で衝突のみで抽出された「自分本位な気持ち」についてある被調査者(野球C)は、『自分が取りに行けるか行けないかという自分本位なところがあった』、『自分が取りに行ける範囲のボールは全部取りに行こうと最初から考えていた』などのように、相手とコミュニケーションを取る気持ちが無かったことを報告している。

(6) “気の緩み”

このグループは、「重要度の高くない場面」、「気の緩み」という2つの下位グループにより構成された。ある被調査者(ソフトボールC)は『高校

生が対戦相手で、勝てるかなという感じだった』と報告している。

(7) “自分が取るボールだと思った”

このグループは、‘相手を信頼していなかった’、‘自分が取らなければいけないという義務感があった’、‘自分が取るボールだと思った’という3つの下位グループにより構成された。‘自分が取るボールだと思った’については、『自分が取るという気持ちで精いっぱい、相手は避けてくれるだろうと思った(ソフトボールB)』などの報告があった。

(8) “ボールを見ていて相手を見ていなかった”

ここでは、『お互いにボールと敵の位置だけしか見ておらず、味方の位置なんか見ていない(サッカーB)』という相手を見るつもりが無かった被調査者と、『ボールをとるぎりぎりまで相手を見ておくべきだったが出来なかった(野球D)』という相手を見るべきだったと考える被調査者がいた。つまり、このような状況において相手を見るべきか否かについては、2通りの考え方があることが示された。

(9) “衝突は仕方ないと思う”

このグループは、‘偶然起きるものであり避けられない’、‘ぶつかってでもボールを取りたかった’という2つの下位グループにより構成された。ある被調査者(サッカーA)は、『敵の位置などの状況に応じて動かなければならず、味方の動きは予測しにくいので、衝突は偶然起きるものである』と報告している。また他の被調査者は『どんな形でもアウトになるなら、ぶつかった方がいいと思った(野球D)』と報告していた。

(10) “衝突してボールを取ることで強さをアピールしていた”

ある被調査者(サッカーB)は、『ボールを取りに行くことが監督やスカウトへのアピールになっていたし、味方にぶつかってでもボールを取ることで対戦相手にも恐怖心を与えられる』と報告しており、積極的に衝突を選んでいた経験を語っていた。

(11) “衝突前のパフォーマンスは良く、集中していた”

このグループは、‘衝突前のパフォーマンスは良かった’、‘集中していた’という2つの下位グループにより構成された。つまり、緊迫した状況やネガティブな心理状態といった時だけでなく、選手本人が良い状態の時でも衝突が起きることが示された。例えば、ある被調査者(野球D)は『緊張感はあるが、集中していた』が、相手は初試合で緊張しており、この被調査者の声掛けを無視して相手がぶつかってきたと説明していた。また他の被調査者(野球C)は『衝突前のパフォーマンスはどちらかといえばいい方』だったために、‘自分本位な気持ち’を持った結果、ぶつかったと説明していた。

(12) “躊躇を避けようとした”

このグループでは例えば、『お見合いよりも衝突の方が、2人とも取りに行く分どちらかが取れる可能性がある(野球C)』という報告が得られた。

(13) “相手を避けようとしたが出来なかった”

例えばある被調査者(ソフトボールA)は『スクイズをされてボールを取りに行ったらキャッチャー(相手)が出てきており、止まれずにぶつかった』と報告した。つまり、“衝突は仕方ないと思う”などのグループとは対照的に、相手に気付いて衝突を避けるために止まろうとしたが失敗してぶつかった事例もあった。

(14) “悪影響”

このグループは、‘衝突には失点や怪我のリスクがある’、‘衝突による悪影響’、‘躊躇と衝突の悪循環’という3つの下位グループにより構成された。このうち、‘衝突には失点や怪我のリスクがある’は、被調査者が想定していた悪影響である。例えば『ぶつかると痛いし、怪我をするかもしれない(サッカーB)』という報告が得られている。一方で、‘衝突による悪影響’、‘躊躇と衝突の悪循環’は実際に起きた悪影響であり、躊躇で報告されたような悪影響の他に、衝突により身体を痛め、次の試合を欠場したという報告もみられた(ソフトボールB)。また、実際に衝突した

ことで衝突への恐怖心が生まれた結果、『2人の間に来たボールに対してお互いが遠慮して一瞬の間ができた(ソフトテニス女子)』という報告もみられた。

(15) “影響はなかった”

このグループは、‘怪我のことは考えていない’、‘衝突による影響はない’という2つの下位グループにより構成された。‘怪我のことは考えていない’は、被調査者が想定していた影響である一方で、‘衝突による影響はない’は実際に衝突した後の影響である。‘衝突による影響はない’についてある被調査者(野球C)は、『エラーに比べたらそんなに影響はないし気にしていなかった』と報告しており、衝突に対し割り切った考え方をしていることがうかがえた。

(16) “衝突後、対策を練った”

対策として挙げられたのは、衝突した相手との守備範囲や声掛けなどの確認、他のチームメイトとの話し合い、守備や声掛けへの意識を高めた、などであった。

#### IV 考察

本研究の目的は、チームメイト間の躊躇と衝突の生起に関連する要因を質的手法を用いて明らかにすることであった。まず、選手の心理面に関連する要因が躊躇、衝突ともに抽出された事から、躊躇、衝突には選手の心理状態が影響する事が明らかとなった。例えば、“緊迫した状況”、“ネガティブな心理状態”、“気の緩み”、“自分が触ってミスをしたくなかった”などの感情に関連した要因が抽出され、プレッシャーがかかりネガティブになる場面や、逆に緊張感が無い場面において躊躇や衝突が起きる事が示された。このように、Ogawa and Sekiya (2013) が示した不安感情と失敗行動との関連が本研究でも示された一方で、気の緩みという低い緊張状態も失敗行動と関係する事が明らかとなった。また高すぎる緊張状態や低すぎる緊張状態が低いパフォーマンスと関係するという結果は、逆U字仮説と一致する結果である。このような結果から、躊躇や衝突を防ぐためには、自

身の感情をコントロールして最適な緊張状態とする心理面のトレーニングが必要だといえる。

さらに、“2人が取りに行ける範囲にボールがきた”、“いつもと異なる状況”、“コミュニケーションのミス”、“自分が取るボールだと思った”など、ボールを含む周囲の状況などへの認知に関連した要因も多く抽出された。これらは、結果的にコミュニケーションのミスになることが考えられ、従来から言われている声掛けの重要性(e.g., 橋爪, 2000; 吉田, 1986)とも繋がる。つまり、躊躇や衝突を防ぐためには、感情をコントロールするトレーニングだけでなく、相手の動きの把握や戦術トレーニングといった認知に関わる部分のトレーニングも行うことが重要だといえる。

そして、躊躇や衝突の影響はないという報告も多少みられたものの、躊躇や衝突により悪影響が生じたという報告の方が多かった。さらに、失敗行動後に守備範囲の確認をするなど、何らかの対策を練ったという報告も多く得られた。つまり、多くの選手たちが躊躇、衝突を起こしたくないと考えている事が明らかとなった。

一方で、躊躇と衝突の間で異なる部分も示された。例えば、誰がボールを取ると思っていたかという観点でみると、躊躇では“自分が取るボールだと思った”選手もいれば、“相手が取れると思った”という選手もおり、様々なパターンの事例があった。しかし衝突では“自分が取るボールだと思った”という要因のみであり、相手が取るといった報告は得られなかった。

躊躇や衝突に対する捉え方という観点でみると、衝突では、“衝突は仕方ないと思う”や“衝突してボールを取ることで強さをアピールしていた”という報告のように、良いパフォーマンスのためにプレイの選択肢の1つとして衝突を受け入れている選手たちがいた。ただし、全ての選手が衝突を受け入れていた訳ではなく、“衝突を避けようとした”、“相手を避けようとしたが出来なかった”という報告のように、衝突を否定的に捉える選手もおり、衝突への捉え方は選手によって異なる事が示された。一方で、躊躇に関しては、“躊

躊躇を避けようとした”という報告のみであった。つまり、躊躇は衝突とは異なり、全ての選手から否定的に捉えられている失敗行動だといえる。

さらに、相手が見えたかどうかという観点で見ると、躊躇では“相手が見えた”という報告のみで、相手が見えなかったという報告は無かった。しかし衝突をみると、相手が見えている場合と見えていない場合があった。例えば“相手を避けようとしたが出来なかった”という報告をした選手は、衝突する前に相手が見えていたと考えられる。一方で、“ボールを見ていて相手を見ていなかった”という報告にあるように、意識的または無意識的に相手を見ていなかった選手も多くおり、衝突では様々なパターンがみられた。

また、躊躇のみでみられた“体が動かなかった”という報告には、2つのパターンがみられた。1つは試合序盤で体が動かなかったというものであり、原因としては、ウォーミングアップ不足や試合への入り方の集中が低かったことなどが考えられる。もう1つは、頭が混乱して体が動かなかったというものであり、情報処理における混乱が躊躇に繋がるということが示唆された。具体的にどのようなメカニズムによりこのような運動感覚が生じるのかは本研究では明らかに出来ず、この点に関しては今後の検討が必要といえる。

最後に、パフォーマンスという観点で見ると、衝突のみにおいて、失敗行動が起きる前のパフォーマンスが良かったという要因が得られた。この要因には、2つのパターンが含まれていた。1つは、自分は集中しておりパフォーマンスが良かったものの、相手選手は緊張しており、自分の声掛けを無視して相手がぶつかってきたというものであった。もう1つは、自分のパフォーマンスが良かったためにどんなボールも自分が取りたいという気持ちとなった結果、相手選手とのコミュニケーションのミスが生じ衝突したというものであった。つまり、自身が高いパフォーマンスを発揮していた場合でも、相手選手の高い緊張状態や自身の自分本位の気持ちによって選手間でコミュニケーションに失敗した場合には、衝突が起きる

事が明らかとなった。

以上のように、本研究によりこれまで明らかにされていなかった要因が示された。特に、これまで選手の技術的な単純ミスとされ（氏原，2013）、声掛けや先取りした意思表示（e.g., 橋爪，2000；吉田，1986）で対応されてきた躊躇や衝突には心理的要因も関わっており、それにより声掛け等のコミュニケーションが十分に機能しなくなる事が本研究により示唆された。一方で、躊躇や衝突に対する捉え方や選手の知覚などが、躊躇と衝突の間で異なることも明らかとなった。本研究の限界としては、要因間の関係性や、各要因の影響の強さを明らかに出来ていないことが挙げられるため、躊躇や衝突について今後も検討する必要がある。

## 注

- 1) サッカーJリーグの試合において、敵チームの選手が打ったシュートに対して2名の守備選手が躊躇した。その結果、失点となった（日刊スポーツ，2010）。
- 2) 春の高校選抜野球の試合において、外野手の選手と中堅手の選手が衝突した。選手は肺挫傷などの怪我を負った（日刊スポーツ，2014a）。また、プロ野球の試合において、外野手の選手と内野手の選手が衝突した。選手は鼻骨骨折などの怪我を負った（日刊スポーツ，2014b）。

## 文献

- フリック：小田博志・山本則子・春日 常・宮地 尚子訳（2002）質的研究入門－〈人間の科学〉のための方法論－。春秋社：東京。
- 橋爪宏幸（2000）ダブルス上達 Book vol.1 基本編。学習研究所：東京。
- 川喜田二郎（2005）続・発想法（56版）。中央公論新社：東京。
- 日刊スポーツ（2010）8月19日朝刊。
- 日刊スポーツ（2014a）3月29日朝刊。
- 日刊スポーツ（2014b）3月31日朝刊。
- 小川 茜（2012）習得過程及びプレッシャー下に

- おける対人協応運動課題実施時の譲歩及び衝突の特徴. 広島大学大学院総合科学研究科修士論文. (未公刊)
- Ogawa, A. and Sekiya, H. (2013) Changes of conceding and colliding behaviors in acquisition and under pressure in an interpersonal motor task [Abstract]. NASPSPA 2013 Conference Abstracts, 35: 43.
- 田村 進・沖原 謙・坂手照憲・武田守弘 (1998) サッカープレイヤーの情報処理過程に注目したパスミスの研究. 広島体育学研究, 24: 21-30.
- 田村 進・坂手照憲・川西正行・古田 久 (2004) 高校バスケットボールプレイヤーのパスミス発生原因の認知に関する研究—覚醒水準と情報処理過程に焦点を当てて—. 広島体育学研究, 30: 19-28.
- 氏原 隆 (2013) バレーボール競技におけるミスとパーソナリティの関係について—単純なミスの発生原因としてのパーソナリティ特性の検討—. バレーボール研究, 15(1): 42-48.
- ウィリッグ: 上淵 寿・大家まゆみ・小松孝至訳 (2003) 心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて—. 培風館: 東京.
- 吉田雅行(1986)バレーボールにおけるコンビネーションプレーの位置づけとその内容. 大阪教育大学紀要Ⅳ 教育科学, 35(2): 231-239.